

福田友之著

『東北北部先史文化の考古学』

工藤 清泰

古稀を迎えた福田友之氏（以下、著者とする）は、前著『津軽海峡域の先史文化研究』（以下前著と略）に続いて『東北北部先史文化の考古学』（以下本著と略）を上梓した。標題を見て気づく方もいると思うが、弘前大学人文学部文学科国史専攻卒業でありながら、著者は「先史」の言葉に強いこだわりを有している。

東北北部における旧石器・縄紋・弥生（続縄紋）から古代における時代名を、「先史」とする時期区分の考え方は、山内清男の考え方を踏襲している。戦前に「先史考古学会」を創設・主宰して、一九七〇年の逝去後に出版された『日本先史土器の縄紋』（一九七九 先史考古学会）の標題にも見られる通り、「先史」の概念にこだわり続けた日本考古学の泰斗で縄紋学の父・山内清男の影響力は大きい。

山内最晩年の三年間は、著者が弘前大学学生、東北大学修士課程の時に、その間に、岩木山麓で表採した石槍の写真を送って縄紋時代草創期のものか鑑定をお願いするなどの交流を得て、今もそのハガキや手紙を大事に持っているという話を聞く時、著者は、根っからの考古学研究者だと感じる。

本著は次の内容で構成されている。

第1章 おとし穴・鯨類

- 第1節 青森県域のおとし穴―円形のおとし穴を中心に―（新稿）
- 第2節 考古学からみた中掘浮石の降下年代（一部新稿）
- 第3節 下北半島尾駁・鷹架沼周辺の溝状土坑群（一部新稿）
- 第4節 堅穴住居跡等との重複例からみた溝状土坑の年代
- 第5節 津軽海峡南岸域の先史鯨類利用
- 第2章 交流・装身具
 - 第1節 深浦産黒曜石の広域分布とその意味（一部新稿）
 - 第2節 東道ノ上（3）遺跡のメダカラはどこから来たか（新稿）
 - 第3節 青森県域出土のヒスイ製玉類
 - 第4節 青森県域出土のヒスイ製玉類（2）（新稿）
- 第3章 祭祀遺物
 - 第1節 鼻曲り土面（一部新稿）
 - 第2節 青森県域出土の顔面装飾付き土器（新稿）
 - 第3節 狩猟文土器考
 - 第4節 狩猟文土器再考―津軽海峡域特有の絵画土器―
 - 第5節 狩猟文土器再々考（新稿）
 - 第6節 青森県域出土の動植物意匠遺物（一部新稿）
- 第4章 青森県域の遺跡
 - 第1節 洞穴・岩陰遺跡（新稿）
 - 第2節 島の遺跡
 - 第3節 津軽海峡・小川原湖発見の先史遺物（新稿）
 - 第4節 北日本の山岳遺跡（一部新稿）

附編 青森県域の遺構・遺物集成（新稿）

附表1 青森県域のおとし穴(Ⅰ～Ⅲ) 一覧

附表2 青森県域の溝状土坑一覧

附表3 青森県域出土のヒスイ製玉類一覧

附表4 青森県域出土の動植物意匠遺物一覧

附表5 青森県域の海底・湖底発見の遺物一覧(縄文・弥生時代以外)

全体の構成をみて気がつく点は、前著(書評は、『弘前大学國史研究』第一三七号にあるので参考にいただきたい)になかった「遺跡・遺構論」が加わったこと、そして新稿が多く存在するとともに既刊論文を補訂(二部新稿の部分)したうえで各論考の現在の価値を高めている点である。各論考の概述内容は「序」の中で著者自身が述べていることから、評者は各章の興味深い事項を中心に紹介したい。

第1章では、考古学研究の上でメジャーとはいえない「おとし穴」遺構を集成して、その用途・課題を考察している点である。

著者自身が調査した、一九七九・八〇年の六ヶ所村・発茶沢(Ⅰ)遺跡の溝状土坑群と一九八一年の八戸市・鶉窪遺跡の円形おとし穴に端を発し、年代決定が極めて難しいおとし穴遺構を降下火山灰や堅穴住居(建物)跡との重複関係から年代推定するとともに、分布状況も精査する。第1～4節における成果である。ただ、これらの節を読了後、課題提示はしかたがないとしても、おとし穴の成立原因や地域性の有無(例えば、安藤広道 一九九三「陥し穴猟はどのようなものだったか」『新視点日本の歴史第1巻』新人物往来社など)に踏み込む部分も欲しかった、というのが率直な印象であった。

第2章では、交流・装身具の中で、深浦産黒曜石の広域分布を提示し

たこと、そして東道ノ上(3)遺跡出土のメダカラガイの搬入ルートを推測したこと、さらに著者が長年にわたって研究テーマとしてきたヒスイ玉の集成と交易研究に注目したい。

黒曜石の産地同定は、前著書評にも示した通り一九八〇年代から活発化するが、著者は深浦産黒曜石が後期旧石器から縄紋時代草創期にかけて、五〇〇キロメートル以上も離れた富山県南砺市立美遺跡から出土する広域分布の意味を、ケンブリッジ大学のレンフリーの交換モードを意識しながら考察する。この時期から「北日本各地や日本海沿岸では、各地域間の緩やかなネットワークがあった」と考え、後のヒスイ流通につながることを示唆する。斎藤岳が現在までの黒曜石分析を総括(斎藤岳 二〇一七「青森県の黒曜石研究」『研究紀要第二十二号』青森県埋蔵文化財調査センター)している中でも、著者の論説に変更要因がないことは、著者の熟考を示すものとして特筆できる。

メダカラガイは、前著第IV章に後続する貝文化の追求である。著者は三方を海に囲まれた本県海岸の沿岸部を自らの足で歩き、貝類生息調査を行ったうえで、貝塚出土の貝類の交易問題を考えたと聞いている。本県の長い海岸線のどこに行けばメダカラガイが採集できるか、その問題意識のもとに生息確認まで一〇年以上に亘って本県の海岸を歩いた。著者は、まさしく縄紋人の行動体験を通して縄紋人と会話しているのである。

ヒスイに関しては、県内出土総数の半数近い図を掲載していること、三内丸山遺跡出土の円球・円盤形の大珠を「三内丸山型大珠」と仮称・区分したことは、今後の本県ヒスイ研究に資することはもちろんである

が、東北北部の縄紋人がヒスイを志向した意味を、従来の硬質装身具・再生・魔除け・ステイタス論に加えて、著者は、白地に青のヒスイ色を冬（雪の白）から春（青）を待つ雪国人の心情や願望に重ね合わせる情緒的思考も持っている。

第3章では、祭祀遺物の中で「鼻曲り土面」・「顔面装飾付き土器」・「狩猟文土器」の集成と各種課題を提示している点に注目したい。祭祀遺物は人によって見方が違う。

異貌の土面である「鼻曲り土面」五点の資料提示と、機能・用途・年代等に関しての考察は、甲野勇以来の学史的検討から始まり、変身(Metamorphosis)という人類の基層心理に及ぶ。ここでも体験考古学研究者らしく実際に土面を製作して実用・非実用性を検証したうえで、仮面と土面の違いを明確にして、文化人類学・民俗学の事例を参考にしている。結論として、土面は、「一定の墓域を象徴したり悪霊から守護する機能を持ったもの」で葬送儀礼に関連する遺物と考え、縄紋時代晩期中頃（大洞C1～C2式土器の頃）の製作と推測する。

「顔面装飾付き土器」と呼称した遺物は、学史的検証を踏まえて集成し、県内三十五遺跡と七十八点の遺物を提示する。縄紋時代中期・後期・晩期にみられるこれらの土器は、精霊（カミ）の顔を表したもので、土器の内容物である食物などを魔物から守る魔除けの意味があつて、いわゆる祭祀・儀礼の場で用いられたものであると結論づける。

「狩猟文土器」に関しては、分布域は宮城・山形両県を除く福島県から津軽海峡域までとして、発生地を特定出来ない状況と結論づける。ただし、類例の増加とともに、その図象の中で縄紋時代を代表する遺物・

石鏃を装着する道具《狩猟具》である弓矢の紋様と狙う獲物の紋様（動物文）のほかに、とりわけ樹木文に注目する。樹木文は、文化人類学の成果に学ぶと汎世界的にみられる「世界樹」の図象とみてよく、縄紋時代の巨木信仰の成立を背景に出現したと考えた。特に、日本民藝館所蔵の狩猟紋土器を研究書に掲載したのは初めてと思われる。この土器の掲載は、早くからその所在を指摘し教示いただいていた恩師・芹沢長介氏への学恩に報いるものであらう。

これら三点の土製品・土器意匠を考察する姿勢として、文化人類学や民俗学の事例を参照していることは、考古学が単純に「モノ」だけではなく「コト」までも追求する学問領域であることを著者自身が示しており、モノの集成とコトの解釈は後輩研究者に向けた^{はなむけ}贈であると感じる。ただし、記述の関係とは言い、同じ章内に同一の図版が重複することと違和感を有したのは評者だけではないはずである。

第4章では、洞穴・岩陰遺跡、島の遺跡、山岳遺跡というこれまたマインナーな遺跡を集成して、なぜ遺跡が形成されるのかと追及する姿勢、そして津軽海峡・小川原湖に沈む水中遺跡を提示して、今後の水中考古学の奮起を促す点を評価したい。紙幅も尽きてきたので、逸話を一つ。

第2節の島の遺跡では、青森市浅虫の湯ノ島を紹介している。記述の通りカタクリを見るために渡島して遺物を採集、後日市教委のメンバーと確認調査をしている時、たまたま「道の駅・湯ノさ浅虫」に友人と行っていた著者夫人は、4階展望風呂から、島の海岸で動きまわる市教委職員たちに混じって、著者がいるのをすぐ見つけ、眺めていたとのことである。書評ではあるが著者の行動を注視していた夫人に拍手を送りたい。

最後に、評者が数えた巻末の引用文献数は七〇七点、附表1～4の引用文献数は一〇七一点あり、重複が存在したとしても文献を開いて確認した数は二〇〇〇回以上にのぼることは確かである。著者の姿勢は、辛抱または鍛錬のたまものであるとともに、「JOMON」は「JOMON」・「JUMON」とすべきと頑固おやじの側面も有する。あとがきにある「生来の天邪鬼」な考古学研究者の労をねぎらいたいと思う。

本著は、青森県考古学において若手研究者に奮起を促す研究集成であるとともに、自らが資料集成の踏み台になろうとする強い決意を感じさせる著書である。

(B5判、三〇〇頁、本体二一〇〇円＋税、同成社)

(くどう・きよひと 弘前大学國史研究会会員)